

コ ー ル マ イ ン 未 来 構 想

記憶を紡ぐ — 炭坑文化の未来を考える

2024年11月2日[土]～24日[日]

会期：2024年11月2日(土)～11月24日(日)

開館時間：9:30～17:30(最終日は16:30まで) ※入館は30分前まで

休館日：月曜日(祝日の場合はその翌日)

観覧料：一般800(700)円、高大生400(300)円、小中生200(100)円、未就学児無料

※()内は20名以上の団体および田川市在住者[要身分証明書]の料金

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介助者1名無料

※土曜日は高校生以下無料

協力：アートフロントギャラリー、田川市石炭・歴史博物館

後援：田川市、田川市教育委員会



藤堂《筑豊バッテリー》2020年

記憶に基づく表現から遺された素材に視点が変わるまで

本展では、炭坑文化をテーマに、炭坑記録画に代表される記憶に基づく作品から、素材としての石炭やボタに注目した表現へと移り変わる過程を展示します。

戦争の勃発により石炭需要が急増し、筑豊の炭坑文化は華やかに開花しました。当時、多くの著名な作家が筑豊を訪れ、炭鉱に足を運んだことは、文化的にも大きな影響を与えました。一方で、過酷な労働環境の中で、炭鉱労働者たちは文化芸術から次第に遠ざかりつつありました。それでも、自身の記憶を子や孫に残したいという思いから、驚異的な作品が生み出されました。その後、戦争とエネルギー革命による炭鉱の隆盛と衰退を経験し、その翻弄された様子を「負の遺産」として捉えた画家たちも現れます。さらに次世代の作家たちは、時間の経過とともに炭鉱の明暗両面をより客観的に見つめることができるようになりました。娯楽文化が栄え、人々が集まった「光」の側面と、労働者の人権が奪われた「闇」の側面。この二面性を持つ炭鉱の記憶は、現代の作家たちの作品にも少なからず反映されています。

本展は、これらの表現の流れを辿りながら、記憶の継承において文化芸術が果たす多面的な視点を提示します。



藤堂《Block Book「写真万葉録・筑豊」》2020年



國盛麻衣佳《Coalmine Portrait 01》2010年

展示構成

本展では、以下の4つの展示構成を通じて、近代化を支えた筑豊を多面的な視点から読み解きます。

1. 素材の視点——藤堂「筑豊ボタ」

現代作家・藤堂は、ドイツ滞在中からその土地の歴史を刻んだ石を切断し、切断面に積層ガラスを埋め込んだ作品を制作してきました。これらの作品は、地域の歴史と時間の重層を表現し、観る者にその土地との深い繋がりを感じさせます。今回出品する《筑豊ボタ》(2020年)では、筑豊のボタ(かつて廃棄された質の悪い石炭)を用い、積層ガラスとの組み合わせによって新たな価値を生み出しています。しかし同時に、作家はこの作品を函に入れ、ボタで覆い隠すことで、元のボタ山の風景を再現し、廃棄物としての役割に還元しています。ここには、炭鉱遺産の持つ二面性が鑑賞者に想起されます。



藤堂《筑豊ボタ》2020年、photo: 伊奈英次

2. 地域との関わり——國盛麻衣佳「見てきたもの」

國盛麻衣佳は炭鉱をテーマにした作品を制作しています。自身のルーツが炭鉱にあることを知った彼女は、地域の歴史を伝えるために石炭を素材とした子ども向けのワークショップを始めました。しかし「炭鉱はそんな軽いものじゃない」という言葉を受け、本格的に歴史調査を開始しました。作品《見てきたもの》(2023年)には、作家がかつて目にしたが、今は失われてしまったもの(例: 西鉄8000形電車)が描かれています。國盛は刹那的なプロジェクトではなく、現地に赴き、地域住民との長期的な交流を通じて制作を行っています。



國盛麻衣佳《見てきたもの》2023年

3. 記憶を紡ぐ——記録画の登場

明治から昭和の筑豊炭田を生きた山本作兵衛や、三井田川鉱業所で働いた石井利秋は、次世代に炭鉱の記憶を伝えたいという強い思いから、膨大な点数の作品を生涯をかけて描き続けました。石井利秋の制作に感銘を受けた片岡寛は、自身の勤める中学校で若い世代が石炭を知らないことに衝撃を受け、炭鉱シリーズを手掛けました。彼らの作品は、細部まで丁寧に描かれ、執念といえるほどの情熱を感じさせ、今なお私たちの心に深く訴えかけます。



國盛麻衣佳《都市の鼓動》2013年

4. 周囲の労働者のために——文化運動のはじまり

労働者でありながら活動を続けた上野英信と千田梅二は、労働者の文化運動を推進する目的で作品を制作していました。うえだひろしは、千田の版画展を見に行き、同時期に上野と出会ったことがきっかけとなり、木版画を始めます。過酷な労働環境にありながらも、文化活動に積極的に取り組んだ彼らの作品は、力強さと共に、観る者に深い感動を与えます。



上野英信《昇坑》1956年



千田梅二《『サークル村』
創刊号表紙》1958年

展示の見どころ

1. 筑豊を代表する作家の貴重な作品を展示

上野英信の現存する唯一の版画 2 点をはじめ、『サークル村』の表紙を手掛けた千田梅二の版画、そして山本作兵衛の記録画など、筑豊の文化を象徴する作家たちの貴重な作品を多く展示します。

2. 道具、写真、幻灯など多彩なメディアによる展示

炭鉱労働者の象徴であるキャップランプ、日本炭鉱労働組合によって幻灯化された上野英信原作『せんぷりせんじが笑った!』のリメイク DVD、本橋成一や広川泰士といった著名な写真家たちの作品など、様々なメディアを通じて、立体的に炭鉱文化をご覧いただけます。

3. 現代作家の視点から見る「筑豊」

筑豊の歴史を象徴する作品に加えて、現代作家たちによる「筑豊」をテーマにした作品も展示します。藤堂は友人の故郷である筑豊のボタ（選炭後の廃棄物）を用い、新たな価値を見出す作品を制作しました。國盛麻衣佳は松原炭鉱住宅の部材や田川産の石炭を使用し、かつての炭鉱の記憶を未来へと紡ぐ作品を創り出しています。現代作家の視点から再解釈された「筑豊」の姿をお楽しみください。



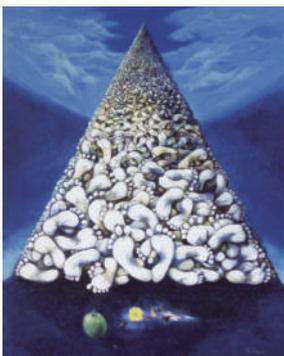
上野英信《ボタ拾い》1956年



本橋成一《福岡 筑豊地方》〈炭鉱〉より、1965年 © 本橋成一



広川泰士《福岡 田川市弓削田》© 広川泰士



石井利秋《ボタ山に花を供える》
1994年



千田梅二《炭坑仕事唄板巻 ま
まになるなら〜》1956年



千田梅二《星空の下のボタ山》1956年



キャップランプ (宇部市石炭記念館蔵)

関連イベント

◎オープニングイベント

日時：2024年11月2日（土）9:30～11:30
出品作家によるトークイベントなどを行います。

◎美術館でオープンカフェ

日時：2024年11月4日（月・祝）11:00～15:00
美術館にコーヒースタンドがやってきます。くつろぎのひと時をお楽しみください。

◎美術館ゼミ「^{おはなししゅう}地の底の御咄衆」

参加者とともに考え、手を動かし、発見していく演習型の講座。当館の館長と学芸員が、笑いあり涙ありの文化の世界へ皆様をお招きします。

▶会期中の11月2日を除く土曜日、13:00～15:00に開催

▶参加無料・当日受付・定員20名

【第1回】11月9日（土）講義「多面的な視点を身につける」

【第2回】11月16日（土）実技「素材が生み出す色と形」

【第3回】11月23日（土）鑑賞「文脈を意識する」

◎ツキ市

日時：2024年11月24日（日）11:00～15:00

主催：久保田鈴菜

月に一度、どこかに現れる、衣食住遊とつながる場所。

人気のマルシェイベント「ツキ市」が大好評につき再び田川市美術館にやってきます。

出展情報などのお問い合わせはこちら rena.kubota3707@gmail.com @ ame.ame.37

■ 田川市石炭・歴史博物館コラボ企画

◎スタンプラリー

期間：2024年11月2日（土）～11月24日（日）

田川市石炭・歴史博物館と田川市美術館の各企画展をご覧いただいた方に記念品をプレゼント！

【注意事項】

- 美術館・博物館の観覧順は問いませんが2館とも観覧する必要があります。
- 上記期間を過ぎてからの記念品のお渡しはできません。
- スタンプ台紙は一人一枚の配布とします。
- 1日で2館観覧する必要はありませんが、押印した台紙の再発行はいたしません。

◎石炭がつなぐアート&ヒストリー

田川市石炭・歴史博物館と田川市美術館の学芸員が、展示の魅力を語ります。

動画は各館のYouTubeチャンネルでご覧いただけます。

▶前編：「炭坑の機械たち」編 10月下旬公開

[博物館公式 Youtube](https://www.youtube.com/@tchm.city.tagawa.1983) (https://www.youtube.com/@tchm.city.tagawa.1983)



▶後編：「コールマイン未来構想」編 11月上旬公開

[美術館公式 Youtube](https://www.youtube.com/@田川市美術館) (https://www.youtube.com/@田川市美術館)



同時開催

令和6年度秋季田川市石炭・歴史博物館 山本作兵衛コレクション原画企画展

ヤマの機械たち 石炭に挑む技術と機械

期間：2024年10月22日（火）～11月24日（日）

会場：田川市石炭・歴史博物館

石井利秋

1911年田川市生まれ。三井尋常小学校卒業後、1925年から約2年間、三井田川鉱業所で坑内雑夫として働いた。その後、画家を志して上京、1932年に日本美術学校洋画部に入学した。在学中および卒業後も大久保作次郎に師事し、1936年帰郷して再び三井田川に勤務した。以後は田川を離れることなく、炭鉱労働のかたわら制作を続けた。1937年、日本美術学校の先輩である横山群らと、田川初の絵画グループ「彩人社」を結成。1942年三井田川鉱業所従業員による洋画同好会「緑水会」を結成。1962年に創立した「田川美術協会」でも中心的な役割を担った。1993年から99年まで同会会長を務めた。2001年、90歳で逝去。

上田博 (うえだひろし)

1933年熊本県球磨郡湯前町に生まれる。1952年から福岡県の日炭高松炭鉱の鉱員となり、上野英信・千田梅二と知り合ったことがきっかけで、『サークル村』などの炭鉱文芸誌のために版画を彫るようになる。1964年に鉱員を辞めた後も同地にとどまり、新聞連載の挿絵を担当するなど、創作活動を続けた。

上野英信

1923年山口県生まれ。北九州市八幡で育つ。京都大学中退後、1954年まで福岡県海老津炭鉱、高松炭鉱、長崎県崎戸炭坑等で坑員として働きつつ、『地下戦線』『サークル村』等の文学運動を組織。炭鉱労働者の日常を絵ばなしなどの独自の方法で描く。閉山後も住みついて、地底の労働者たちの生身の像を描き出し、広く反響をよんだ。作品には、『せんぶりせんじが笑った』『親と子の夜』『追われゆく坑夫たち』『日本陥没期』『どきゅめんと筑豊』や、日本近代の基部をさぐる『天皇陛下万歳——爆弾三勇士序説』、また晩年の『厩屋私記』などがある。

片岡覺

1930年大牟田市生まれ。1937年に田川市へ移り住む。田川市内の学校で助教諭や教諭として勤務し、福岡学芸大学（現福岡教育大学）を卒業後、田川市立の中学校で校長を務めた。田川美術協会や筑豊洋画協会でも事務局長や会長を務め、数々の美術展で受賞し、田川市美術館の館長としても活動した。2022年、92歳で逝去。

川俣正

1953年生まれ。28歳の若さでヴェネツィア・ビエンナーレの参加アーティストに選ばれ、その後もドクメンタなど、欧米を中心に高い評価を獲得し続け、2005年には、アーティストでありながら横浜トリエンナーレの総合ディレクターとして、大規模な国際展の企画を任されている。また、東京藝術大学が革新的な試みとして設置した「先端芸術表現科」の立ち上げに主任教授として着任し、既存の美術表現の枠組みを超えていく試みを実践してきた。現在はフランス、パリ国立高等芸術学院の教授であり海外で最もよく知られている日本人アーティストである。彼の仕事に関わっていく分野は、建築や都市計画、歴史学や社会学、日常のコミュニケーション、あるいは医療にまで及ぶ。

1977年より発表活動をはじめ、第40回ヴェネツィア・ビエンナーレ(1982)、ドクメンタ8(1987)、第19回サンパウロ国際ビエンナーレ(1987)、ドクメンタ9(1992)、第2回リヨン現代美術ビエンナーレ(1993)、第3回ミュンスター彫刻プロジェクト(1997)、第11回シドニー・ビエンナーレ(1998)、越後妻有アートトリエンナーレ(2000～)、第4回上海ビエンナーレ(2002)、釜山ビエンナーレ(2002)、ヴァレンシア・ビエンナーレ(2003)など国内外で多数のプロジェクトや展覧会に参加・発表を行っている。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授(1994年4月～2005年3月)を経て、現在、パリ国立高等芸術学院教授。

國盛麻衣佳

アーティスト。福岡県大牟田市生まれ。先代が炭鉱関係の仕事に従事していたことから地域の歴史に関心を持ち、2007年より炭鉱をテーマとした制作や研究を行っている。女子美術大学 美術学科洋画専攻卒、東京芸術大学大学院 修士課程美術研究科 壁画専攻卒、九州大学大学院芸術工学府環境・遺産デザインコース卒、博士(芸術工学)。最近の活動としては、2023年 京都芸術センター『記憶への手つき Handshake with Memory』、2021年 西日本新聞連載『光と闇を見つめて—炭鉱と美術』(全15回)、2021年 直方谷尾美術館『黒ダイヤにまつわること』展。2020年 単著『炭鉱と美術—旧産炭地における美術活動の変遷—』(九州大学出版)。同著は第15回野上紘子記念・アートドキュメンテーション学会賞を受賞。



千田梅二

1920年富山市生まれ。1943年中川一政に師事。出征し中国・長沙付近で終戦を迎える。1945年12月富山に復員、家は空襲で若き時代の作品とともに灰燼となる。以後東北各地を放浪、筑豊・日炭高松一坑の採炭鉱員になる。1947年初任給で画材を求め、再度絵筆を握る。1948年記録作家上野英信と出会い『労働藝術』に初めて版画を彫る。1958年炭鉱合理化と健康を害し富山に帰郷。吉田桂介から型絵染の手法を習い、カレンダーの製作その他を始める。1980年選暦を機に筑豊に居をかまえる。1991年、『炭坑仕事唄板画巻』で地方出版文化功労賞次席(第4回)。

藤堂

1969年生まれ宇和島市出身。多摩美術大学彫刻専攻を修了後渡独。デュッセルドルフ芸術大学で学び、2003年にダニエル・ピュレン教授よりマイスターシューラーを取得。2011年震災を機に13年間住んだドイツより帰国し現在神奈川県在住。自ら歩いて集めた欧米や日本の石や石炭、レンガ、瓦礫等を切断し、その切断面に積層ガラスを埋め込んだ作品でよく知られており、「場所・時間・空間・歴史・積層」をテーマに制作活動を続けている。



広川泰士

1950年神奈川県生まれ。1974年よりフォトグラファーとして活動を始め、世界各都市での個展、美術展への招待出展多数。講談社出版文化賞、ニューヨークADC賞、文部科学大臣賞、経済産業大臣賞、日本映画テレビ技術協会撮影技術賞、A.C.C. 最優秀撮影賞、他受賞。サンフランシスコ近代美術館、フランス国立図書館、東京都写真美術館、神戸ファッション美術館他で作品が収蔵されている。東京工芸大学教授。

本橋成一

1940年東京・東中野生まれ。1960年代から市井の人々の姿を写真と映画で記録してきた写真家・映画監督。1968年「炭鉱〈ヤマ〉」で第5回太陽賞受賞。以後、サーカス、上野駅、築地魚河岸などに通い、作品を発表。写真集『ナージャの村』で第17回土門拳賞、映画「アレクセイと泉」で第12回ロシア・サンクトペテルブルグ国際映画祭グランプリを受賞するなど国内外で高い評価を受けている。

山本作兵衛

福岡県嘉穂郡(現・飯塚市)生まれ。8歳の時、一家で上三緒炭坑に移住し、やがて兄と共に炭坑の仕事を手伝うようになる。以後、様々な炭坑を転々として坑内で働き続けると同時に、幼い頃から仕事の合間に絵を描くことを好んだ。途中ペンキ屋や鍛冶工見習いの時期を挟むが、63歳になるまで継続して炭坑の仕事に携わる。1957年に炭坑の仕事辞めて以降、炭坑を知らない世代へ記憶をつなぎたいという思いから、断続的に炭坑の記録画を描くようになり、上野英信や菊畑茂久馬らと交流した。

広報用画像貸出について

本展覧会の関連画像を、広報素材としてご提供いたします。
必要事項を記載のうえ、メールもしくはFAXでお送りください。

MAIL : museum@tagawa-art.jp FAX : 050-3385-0499

<p>1. <input type="checkbox"/></p> 	<p>2. <input type="checkbox"/></p>  <p>藤堂《筑豊ボタ》2020年 photo: 伊奈英次</p>	<p>3. <input type="checkbox"/></p>  <p>國盛麻衣佳《見てきたもの》2023年</p>	<p>4. <input type="checkbox"/></p>  <p>上野英信《昇坑》1956年</p>
<p>5. <input type="checkbox"/></p>  <p>上野英信《ボタ拾い》1956年</p>	<p>6. <input type="checkbox"/></p>  <p>千田梅二《『サークル村』 創刊号表紙》1958年</p>	<p>7. <input type="checkbox"/></p>  <p>本橋成一《福岡 筑豊地方》 〈炭鉱〉より、1965年 © 本橋成一</p>	<p>8. <input type="checkbox"/></p>  <p>広川泰士《福岡 田川市弓削田》 © 広川泰士</p>

御社基本情報

媒体名 (URL)

発行日/放送日

御社名

ご担当者

所在地

電話・メールアドレス (データ送付先)

プレスイメージ貸し出しに関する注意事項

1. 本展覧会目的での使用に限ります。使用可能期間は本展覧会終了までとなります。
2. 展覧会名、会期・会場名のほか、画像の使用時には指定するクレジットを必ずご掲載ください。
3. 作品画像は全図でご使用ください。トリミングや文字を重ねるなど画像の加工・変更はご遠慮ください。
4. WEBにてご掲載の場合には、コピーガードを施してご掲載ください。
5. 概要など確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階でお送りいただきますようお願いいたします。
6. 掲載・放送後はお手数ですが掲載誌・同録DVDを1部ご送付願います。WEB媒体の場合は、掲載URLをお知らせください。

お問い合わせ先：田川市美術館 〒825-0016 福岡県田川市新町11-56 TEL 0947-42-6161 FAX 050-3385-0499

広報担当：篠崎海成 学芸担当：佐々木愛